
神様の箱庭

嶺井明月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様の箱庭

【Nコード】

N2776Z

【作者名】

嶺井明月

【あらすじ】

同じ時間に目が覚めて、同じ制服に袖を通し、同じように家を出る。同じように授業を受けて、同じように友達と駄弁って、同じように寄り道をして、同じ時間に家に帰る。

同じ同じ同じ同じ同じ同じ同じ

同じ日々に飽きた少年は『案内人』に誘われて、新たな世界を創る神となります。

初投稿です。よろしくお願いします。短編連作・・・になるんじゃないかと、これは。自分のサイトで連載している物の転載になります。

彼の世界

同じ時間に目が覚めて、同じ制服に袖を通し、同じように家を出る。同じように授業を受けて、同じように友達と駄弁って、同じように寄り道をして、同じ時間に家に帰る。

同じ同じ同じ同じ同じ同じ同じ。

信号を渡ろうと歩行者用押しボタンに指を掛けたとき、ふと概視感に襲われた。あたりまえか、とおもず笑う。毎日同じ時間にここを渡っているのだから。

そうだ。今日は別の道から帰ろう。

くるりと信号に背を向けて、遠回りの小道へ足を踏み入れた。

通り道にあったコンビニに立ち寄って買ったパンを食べながらぶらぶら歩いていると、小さな公園に辿り着いた。なつかしい。昔はよくここで遊んでいたっけ。懐かしさに惹かれて公園に入った。鳩が沢山居る。・・・あれ、前からこんなに居たっけ？

ベンチに座ろうとして、鳩にえさをやっている老人に気がついた。目の前にある『餌をやらないでください』の看板に気づいていないのか、にこやかにパンくずを落としてやっている。

・・・というか、餌付けというより集られてる気がしないでもないんですけど。

「やあ、こんにちは」

老人もこちらに気がついて、微笑をこちらに向けた。

「あの・・・こー一応餌付け禁止なんですけど」

看板を示しながら教えると、老人はあちゃ、と頭を掻いた。

「そうなのかい？ こっちの字を読むのはどうも苦手でねえ……」

そうなんですか、と頷こうとして違和感に気づいた。

『こっちの字』？なに言ってるんだこの人。見たところ外人には見えないし。

「見たところ学生のようにだけど……君の名前はなんて言うんだい？」

「佐藤、ですけど」

警戒しながら答える。

「下の名前は？」

「……有一、です。あの、俺もう帰るんで背を向けて帰ろうとした時。」

足元の鳩にけ躓いた。

「なっ……！」

一気に地面に近づいたパンめがけて鳩たちが一斉に飛び掛る。

鳩にもみくちやにされながらちらりと見えた老人は、相変わらずにこやかに微笑んでいた。

「『君の世界』へようこそ、ユーイチ君」

そういった瞳は、金色の光を放っていた。

気がつくと、そこは元居た公園ではなかった。

もっというなら、元居た『世界』ですらないようだ。

見えるものは金や銀で光る齒車。どこが上でどこが下で、どこまでがこの空間なのか分からないようなそんな空間。

「どうだい？ この世界は」

振り向くと、あの老人が相変わらず鳩に餌をやっていた。

「この世界って……ここだよ」

「ここは君の世界。全てが君の元の世界とは違う世界。君の望み通りに世界を作る事が出来るのさ。私かい？ 私は案内人のオルズ」帽子をあげて軽くお辞儀をした。

「ふざけんな！ 頭おかしいんだろあんた！」

「そう疑うなら、望んでごらん。何でもできるはずだ」

何言っただこの人。それでもとつさに空を飛んでいるところを想像していた。

その途端、

「うおっ！？」

体が宙に浮かび、背の高い老人のさらに上から世界を眺めていた。

「何だこれっ……………！」

「何って……………さっき言っただろう、ここでは君の望み通りに世界が作られるんだ。君が望めば空も飛べるさ」

「何でもできるのか？」

思わず訪ねると、老人は笑顔でうなずいた。

「そう、何でも。この世界で君は『神』になれる！」

「神……………」

ぐるりと体を回して、世界を見渡した。何も無い、歯車だけの世界。目を瞑って、大地と大空を想像した。

目を開くと、そこにはどこまでも広がる大空と、どこまでも広がる大草原。

「ホントに何でもできるんだ……………！」

そうと知ったらもう止められなかった。

次々と想像していく。

大地を駆けるのは馬や牛やライオン。そこに混じってユニコーンやよくわからない生き物。

大空を翔るのは鳩や鷺や鳶。そこにペガサスやドラゴンを混ぜてみる。

天までとどく高い塔。天から降りる逆さの塔。

次々と創造していく。

「『人』に値する動物は作らないのかね？」

「人間も作れるの？」

「ああ。君が望むのなら何でも」

「どんなのがいいのかな・・・？」

軽く唇を湿らせて考える。

せつかく一から人間を作れるのだ。どんな人間にしよう？

俺を、神を敬う人間。姿かたちはそのままでもいいや。原始時代のよ
うな服を着せよう。

目を開くと、そこら中に『人間』がわらわらと集まっていた。

しかし、そこらの動物と何も変わりはない。言葉を喋らず、うな
っているのみ。

「あれ？」

「『言葉』をあたえなくては」

「なるほど」

彼らが日本語を話しているところを想像した。

彼らの唸りが言葉になる。

「本当に神様みたいだ・・・！！」

「本当に君は『神』なんだよ」

突然、叫び声が聞こえた。

「え？」

下を見下ろすと、さっき作った『人間』達が取っ組み合って喧嘩を
始めていた。

「ちよつと待てよ！喧嘩はやめろ！」

しかしこちらの声が聞こえないのか、喧嘩をやめる様子は無い。

「無駄だよ、こちらの声は聞こえない。『神』に出来ない事の一つ
なんだ。こればかりは『神』でもどうしようもない」

老人はさも当然のような顔で言う。

「そんな！ 何でもできるって言ったじゃないか！」

「あー……まあ、言葉のあやというか、なんと言うか……
……神様だって出来ない事の一つや二つあるに決まってるじゃないか」

「……じゃあ、あの喧嘩をやめさせる事はできないのか？」

「『天罰』を与えればいい。彼らに『学ぶ』力を与えたのなら、それで学習して、喧嘩をやめるだろう」

「天罰……」

ぱつと『ノアの箱舟』が思いついた。でもさすがに全員流しては意味が無い。喧嘩しているやつらの上に、滝のような雨を降らせる事にした。

凄いい勢いで雨が降り出し、喧嘩しているやつらが見えなくなった。

そして雨がやんで、

「そんな……」

そいつらは死んでいた。

周りの『人間』達はしんと静まり返った。

「俺は、俺はこんなの望んでっ」

「君の望んだ結果だよ」

振り返ると、老人は相変わらず微笑んでいた。

「ふざけんな！俺はこんなの、」

「確かに望んでいたんだよ」

金色の瞳がすつと細められた。背筋が凍るようなその視線に、言葉を続ける事は出来なかった。

「君はおそらく元居た世界の神話でも参考にしたのだろうが、その神話では人々は死んでしまったろう？しかし君はとっさにそこまで考えなかったからその神話の通りの結果になった。それだけのことさ」

「俺はこんな世界つ……」

「『同じ』は嫌なんだろう？この世界なら、今までとまったく違う世界を自らの手で作る事ができるんだ」
なんともいえない不安に襲われた。

帰りたい。早く元の日常に。同じ毎日に。

「・・・・・・・・戻せよ」

「本当に戻りたいのかい？」

・・・・・・・・すぐに答えられなかった。

毎日同じ事の繰り返し。起きて、学校に行って、帰って、寝て。

俺は本当に戻りたいのか？

「君が本当に戻りたいと願うのなら、いつでも帰してあげよう。」

神『候補は君以外にいくらでも居る』

老人は再び、鳩に餌をやり始めた。

幻想の国

ああ、つまらない。

ぱたりと草原に背中を預け、青い空を見上げ雲を追った。

天まで届く高い塔。天から降りる逆さの塔。

空を翔るは鷺にペガサス。

大地を駆けるライオンやユニコーンの足音も、地面を通じて響いてくる。

生まれてからずっと変わりはしないこの風景。

つまらないつまらない。

無意識に近くに咲いていた小さな花をむしり取る。

「こら！そんなところでぼうつとしてたら、『天罰』が下るよっ！」

川で洗濯を終えてきたのだろう、かごを背負った母さんにどやされて、私は仕方なく立ち上がった。

どうせ何か理由があつて寝そべってたわけでもないし。空なんてみても楽しいはずはないし。

「……仕事よりはちょっと、楽しいかもしれないけど。」

「さあ、洗濯物を干すの手伝っておくれ。これが終わったら父さんたちも帰ってくるだろうから、食事の支度をしないと」

はい、と適当に返事をしながらもかごに手を伸ばし、服を一枚叩いてのばして竿にかけた。

「……ふと思う。」

「ねえ母さん」

「ん？」

「こういう仕事をさ、ほいっと一発で終わらせられる方法があつたらすごいと思わない？」

母さんの手が止まった。

まるでおかしなものでも見るような訝しげな目をこちらに向けて。

「……何かおかしなものでも食べたのかい？そんなことで

きるのは神様だけに決まってるじゃないか。……あんなによくわからないキノコは食べちゃいけないっていったのに……」

食べてないよ、と口をとがらせて洗濯物を干す手を再開した。

……かみさま、か。

きつと毎日楽しいんだろうな。つまらないなんて思う日は、きっと無いんだろう。

……かみさま、ね。

「何か言ったかい？」

「……うん、何でもない」
つまらない、つまらない。

鳥のさえずりで目が覚めた。

「ん……」

今日も清々しい天気だ。

でもきつと、今日もつまらないことの連続だ。そりゃ、全く同じ日なんて一日だって無いんだけど、でも何が起きても、もうおもしろいと思えなくなった。

何でだろ。小さかったときには毎日もうちょっと楽しかった気がするんだけどな。

「起きたんなら早くでてきなさい！」

はい！と大きく返事をして、部屋の扉を開けたら、

「きゅ……っ！」

突然、大量の鳩に襲われた。
目の前が暗くなる一瞬前、金色の瞳を見た気がした。

気がつくと、そこは家じゃなかった。

もっというなら、多分元いた『世界』ですらない。

昼の月の色と夜の月の色に輝く世界。・・・なんだろ、丸いきらきらしたもの、四角いきらきらしたもの、がくつついて、回ってる。

何処が上で何処が下かわからなくて、何処まで続いているかもわからない。

くらくらする。

「ここ・・・どこ？」

「君の世界だよ」

突然の声に振り向くと、見たこともない服を着た老人が鳩にえさをやっていた。

彼は頭にかぶっていた何かを持ち上げて軽くお辞儀をした。

「はじめまして、私は案内人のオルズ。君が世界を作るお手伝いをしてあげよう」

「世界を、作る・・・？」

それは、神様がすることではないのか？

そう、と老人がうなずいた。

「この世界では、君が『神』になれる。・・・想像してごらん」

「え」

戸惑いながら、目をつぶって大きな樹を思い浮かべた。
ずっしりとした幹。大きく広がる枝葉。

「あつ・・・！」

目を開けると、想像したものと全く同じ大樹がそこに在った。
「すごい・・・！」

「さあ、どんどん想像してみたらいい。君はどんな世界を作るのかな？」

ぐると周りを見渡した。何にもない。

どうせなら、私が退屈しない世界を作ろう。

目をつぶって、次々と想像した。

大地。大空。

人々が住むのは、私が住んでいたような木の小屋じゃなくて、壊れにくい頑丈な堅い家。

そう、人々は不思議な力を持つんだ。さらりと指を振るだけで何でも思い通りになってしまう力。もうめんどくさい仕事はしなくていいんだよ。

次々と創造していく。

ゆっくりと目を開けた。

「うわあ………！」

そこに広がるのは想像通りの世界。

人々の服は、目の前の老人のものをイメージしてみた。自分でもなかなか満足のいく世界だ。

きっとこの世界では、退屈なんて無縁だろう！

しかし、老人はどこか不満げだ。

「やっぱり君も、所詮『彼』の世界の子供か………期待するのなら、この世界からだったようだね」

「?………『彼』？」

いや、こつちの話さ。老人はつぶやいて世界を見つめた。

「まあ、味はあっていいと思うよ」

私も自分の作った世界をもう一度見直してみた。

人々は指を振るだけで洗濯物を干し、料理を作る。と、小さな子供たちがおやつを取り合いを始めた。

しかしなぜか、近くの大人は止めようもしない。

「君の声は届かないよ。『神様』の限界だ」

「どうしょ……」

「善悪の観念が無いのかもしれないね。『天罰』でも下してみたらどうだい？」

「天罰……」

母さんの言葉が思い出された。

そして、父さんから聞いた昔の話。

人間で最初に喧嘩をした人たちは、たくさんの雨に打たれ流され死んでしまったという。

それも『天罰』だったそうだ。

「……だめだよ、天罰はだめ」

「何故だい？早く止めないと……」

「でも天罰は絶対だめ！」

「じゃあどうするのかね？」

いわれて詰まった。

何も考えなんてありはしない。でも私が神様になれるなら天罰なんか下したくない。

私は天罰を下す神様なんて大嫌いだったから。

はっと気づいた。

そう、私は神様。

何だって作れるんだから！

私の代わりになる人間を想像した。

私の思いを全部込めて、私の声を世界のみんなに届けるんだ！

「……なるほどね」

『私の代わり』は颯爽と現れて、二人の子供の喧嘩を止めた。おやつを半分に割って、二人にあげたんだ。

「よかった」

君ならもう大丈夫だろう、と老人はいつて、軽く頭の布をあげた。

「元の世界に帰りたくなったら私を呼び給え。・・・・君の世界がよりよくあらんことを」

「え、」

次の瞬間、老人はまるで最初からいなかったかの用に、何も残さず消え去った。

「・・・・誰が帰るもんか」

私の世界の空を、一羽の鳩が飛び去った。

癩癩持ちの国

「それあたしの！あたしに頂戴！」

軽く指を振り上げてあたしはその子からお菓子を奪い取ってやった。

「あー！それ俺の！おまえ自分のもってるじゃないか！」

その子も指を振り上げてきたけれど、手のひらの一降りで道の向こうにまで吹き飛ばしてやった。

「へーんだっ！」

くると裾をなびかせて回って見せた。

石畳の上でオリジナルのステップを踏みながらあたしは回る回る。

踊るあたしを見た人々は勝手に道を空けるから、あたしは誰にもぶつからず踊り進む。

あたしより偉い人も強い人もだあれもない！

あたしが回ってるんじゃないの、あたしの周りが回っているのよ！

赤い石や固めた土で建てられた家の続く道を軽やかにあたしは進む。
鼻歌も思わず漏れ出す。

気持ちよくくるくる回っていたけれど、突然何かにぶつかった。
いったいなあ！

一気に不機嫌になって見上げると、そこに居たのはとても綺麗なひと。

「何よ何よ、何でそこに立ってるのよ！」

あたしが通れないじゃない！

そのひとはどこか悲しそうな顔をして静かに言った。

君は二つ持っているだろう、あの子に返してやりなさい。

「いやあよ、これあたしのなんだから！」

舌を出して言ってやっていつもみたいに手のひらで振り払ってやる
うと、した。

「あっ！」

でもその手はあっけなく捕まれてしまって、そのひとにお菓子を奪われてしまった。

返してあげようね。

相変わらずどこか悲しそうな声で言った。

「…………何よ何よ何よ何よ何よ何よ何よ何よ何よ何よ何よ何よ何よ何よ何よ、何よ何よ何よ、

「何よ何よ！何であたしの思い通りにならないのよっ！」

力ずくで振りほどこうとしてもそのひとは見かけ以上に力が強くて、あたしの力じゃ解けない。あたしの『力』を腕に集中させても駄目だ。

「……………っ放しなさいよ！放せったら！」

君があの子にこのお菓子を返してあげると約束するまで、放さない。

「嫌だつて言うてるじゃないっ！それあたしのなのっ！ぜーんぶ全部、あたしの物なの！」

その人は一層悲しそうな顔をして、小さく首を横に振った。

そんな仕草の一つ一つもむかつくの！

その途端、へなへなつと『力』が抜けていくのがわかった。

「……………何したのよっ！」

君の『力』はね、そんな風に使うために与えたものではないんだよ。

「だから、何を、」

「ちよつといいかね、『代理人』さん」

あたしが更に噛みつくとしたとき、落ち着いたおじいさんの声が割り込んできた。

どうかしましたか。

相変わらずどこか悲しげな声でその人は問いかけた。

「…………『代理人』。聞いたことがある。」

この世界を造った神様の代理人だ。神様は声を持たないから、『代

理人』の声を借りて人々に語りかけるといふ。

「……でも神様より、あたしの方がきつと強いわね！」

「そのお嬢さんを、私に譲ってはくれないかね？」

この子が謝ってからなら、とその人はいふ。

「何よ、あたしは絶対謝らないっていつてるでしょ！」

ほんとにほんとにむかつくわ！

もつといつてやろうと口を開こうとしたら、おじいさんがあたしの耳元に囁いた。

「形だけでいい。謝ったなら、君をもつといい世界へ連れて行ってあげよう」

思わず、おじいさんの顔をまじまじと見つめた。

「……ほんと？」

「ああ、ほんとうさ」

ここより、もつといい世界。

……それは、どんなところなんだろう？

見てみたい、あたしが知らないところがあるなんて許せない！

「……ごめん、なさい」

その子にお菓子を突き出して、謝罪の言葉を口にした。あくまで口だけ。だってあたしは本当に悪くないもの！

その子はさっとお菓子を受け取ると、あっという間に遠くへ走っていった。

それでいい。

『代理人』は静かにうなずいて、ふわりとどこかに消えてしまった。

「さあ、謝ったわよ！あたしをもつといい世界へ連れて行ってくれるんでしょ？」

くるりと背後のおじいさんを振り返って笑った。

おじいさんも笑い返して、

「じゃあ、行こうか」

そう言ったとたん、ばさばさつと羽音が天から降ってきた。

「え・・・・・・・・・・？」

あれは・・・・・・・・・・鳩？

ぶつかる、と思った瞬間、一気に目の前が真っ暗になった。

意識が飛ぶ一瞬前、おじいさんの瞳が太陽みたいに光った気がした。

気がつくと、そこは路上じゃなかった。

もっというなら、ここはきっと元いた世界でも無いのではないかしら。

太陽の色と月の色に輝く空間。ぐるぐるぐるぐる回ってる。

どちらが上でどちらが下で、どこまで広がっているのかわからない。

ここが『もっといういい世界』？だったら落胆するばかり！

「ここは『君の世界』なんだ。これから君自身が『もっといういい世界』にしていけばいい」

「どういうこと・・・・・・・・・・？」

その前に、とおじいさんは帽子を軽くあげた。

「自己紹介がまだだったね。私は案内人のオルズ。君が世界を作る手助けをしてあげよう」

手助けなんかいらないわ、と笑い飛ばしてやった。

「やり方だけ教えて頂戴。その後はあたしで何でもできるもの！」

「・・・・・・・・・・想像するんだよ。それだけでいい」

「なんだ、簡単じゃない！」

夢見るように軽く目をつむって、くるりと回った。

ステップを踏みながら、次々と想像した。

お菓子でできた国なのよ、花があちこちに咲いてるの。

広く踊れる広場があって、きらきらした綺麗なものもたくさんある

んだわ！

あ、でもそうね、『力』はいらないわ。『力』をもつのはあかし一人で十分ね！

くるりくるりと回りながら、次々と創造した。

ぱちりと目を開けた。

「ああ………！」

思わず声が漏れた。

なんて素晴らしい世界でしょう！

ここはあたしの理想の国、本当に世界はあたしを中心に回るのね！

隣のおじいさんも満足げだ。

「なかなかいい世界だね」

「そうでしょう？ 彼らはあたしの召使い！ あたしと踊るためにいるのよ！」

そういつてまたくるりと回ってみせると、おじいさんはなんだか変な顔をした。

「ああ………そのことなんだけど………」

なあに？ と訪ねると、おじいさんは帽子を脱いで頭をかいた。

「『神様』はね、『世界』に創造以外で介入できないんだよ。だから君は、彼らと踊れない」

だから君の世界には『代理人』がいたんだよ、とおじいさんは言った。

何よ、

何よ、

「何よっ！ それじゃあ意味が無いじゃないっ！ お菓子の街もかわいい花も広場も綺麗なものも何もかもあたしがいなきゃ意味がないでしょー！」

あたし神様なのよ最強なのよ、

「何で何で何で何で、何であたしの思い通りにならないの!？」

あたしの思い通りにならない世界なんて、

「大っ嫌い!」

叫んで嵐を巻き起こした。お菓子は崩れ花は根こそぎ抜けてゆく。

そんな光景を見てもあいつはおやおやなんて言っただけ薄ら笑いを浮かべてる。

そういうのも全部むかつくのっ!

「それなら君の元居た世界の『神様』のように『代理人』なんてたててみたらどうかね？」

君の言うことを人々に届けられるよ」

「あたしあいつ嫌いよ!」

そう叫ぶと雷があたしの世界にほとばしった。

それを見てやれやれ、とあいつは言っただけ、

「……まあ、元の世界に戻りたいというのならまた私を呼んでおくれ」

「誰が呼ぶのよ!全部全部あんなのせいじゃない!」

大きくため息をついて、あいつは消えた。

……いいわ。あたしはここをもっともっともーっという世界にして、あいつの鼻をあかしてやるんだから!

あたしはまた、綺麗な世界をそうぞうした。

秩序ある国

今日は久しぶりに晴れた。

思いっきり背伸びをしてから道ばたのあめ玉の花を摘んで口に放り込んだ。

どうやら今日は僕らの神様の機嫌がいいらしい。ここ最近はずっと機嫌が悪かったようで、大雨が降り雷が落ち、猛烈な風が街を滅茶苦茶にしまっていた。

でも、僕らの神様は壊した世界をなんだかんだで元に戻してくれる。今日みたいな機嫌のいい日の世界はなかなか楽しくていいところだと思ふし。

口の中のあめ玉をかみ砕いて、今度はチョコに手を伸ばした。

今日はこの先の広場で『舞踏会』が開かれる。

盛り上がったときはとても楽しいお祭りなのだけど、僕らの神様の機嫌を損ねてしまうことも多いから、みんな考え抜いたオリジナルのダンスを全力で披露する。

それでも僕らの神様は機嫌を損ねてしまうことがあるから、神様はよくわからない。

道ばたのお菓子を減らしつつ歩いていると、あつというまに広場についた。世界が狭いというか、広場があまりに大きいというか。

とにかく世界中の人々があつまった広場では、あちらこちらでダンスが始まっていた。

僕も前の『舞踏会』の後からずっと考えていたステップを広場の片隅で披露する。

主流の流れるようなめらかなステップではなく、腕や足を切れよく動かしていく少しテンポの速いステップだ。ずれた眼鏡をステップの流れに合わせて直しつづリズムを刻んでいく。

僕らの神様の機嫌が悪くならないといいけど。

みんなそんなことを考えながら一心不乱にそれぞれのステップを踏む。

その時、

「みんな逃げろっ！」

突然の大嵐が吹き荒れはじめた。神様は今年もまた機嫌を損ねてしまったのだ！

でももうみんな慣れっこで、身をできるだけ屈めて這うようにして帰路に急いだ。

何が神様の機嫌を損ねてしまうのかわからないから対策の打ちようもない。だから毎年同じことが起こる。

でもみんな、もしかしたら今年こそは………と一縷の望みにかけて、踊りを編み出すのをやめないのだ。

「………やめられない、の方が正確かな」

思わず声に出てしまったけど、この嵐じゃきつと隣の人にも聞こえちゃいないよな。

無秩序だ。まったくもって無秩序だ！

きれいな花は根こそぎ飛び、目の前をあめ玉やら砂糖菓子やらが行き交う。

そこには秩序なんか欠片もありはしない。

こんな神様に比べたら、僕の方がうまく世界を作れるに違いない！

「ほう、大分自信があるようだね」

突然の声に顔を上げると、この嵐をもつとせす一人の老人が目の前にたっていた。

この嵐で吹き飛ばされるところか、にこやかな笑みさえ浮かべてい

る。・・・・・・・・そういえば、声もはつきりと聞こえた。

・・・・・・・・まさか、僕らの神様じゃないよな？

さっきまでの神様に対する暴言の数々を思い出しながらおずおずと尋ねた。

老人はさも愉快そうに笑った。

「まさか。まあ、この世界の住人ではないけれどね」

「はあ？」

まあ、私のことはともかく、と老人は話をそらして、

「そんなに自信があるのなら、君が世界を作ってみるかい？」

世界が、音を失った。

「・・・・・・・・はあ」

「君の思い通りの世界が作れるんだよ。どうだね？『秩序ある世界』というのは」

・・・・・・・・秩序ある世界。なんて魅力的な響きだろう！

でも僕が神様になる？そんなの無理に決まってるじゃないか！

この世界に神は唯一僕らの神様だけなんだし。

「でも君の方が、うまく世界を作れるんだろう？」

確かにさっきはそう言った。・・・・・・・・でも、

「試してみたい気持ちの方が大きいね。いいよ、僕に世界を作らせて」

老人の瞳を見つめ返して僕は言った。

その瞬間、空から大量の鳩が降ってきてあつという間に何も見えなくなつた。

視界が真っ暗になる一瞬前、老人の瞳が雷の色に見えた。

気がつくと、嵐はすっかりやんでいた。

・・・・・・・・その代わり、元いた世界では無いようだけれど。

雷の色と輝く砂糖菓子色の、平たいあめ玉のようなものが規則正

しく組み合わさってまるで踊っているようだ。

どの向きが上でどの向きが下なのか、どこがこの空間の果てなのか
わからない。

「……確かにこの世界に秩序はあるようだけど。

「で、どうやったら世界が作れるんだ？」

「気が早いよ、と老人が笑った。

「私は案内人のオルズ。新しい『世界』を作る子供を捜していたんだ」

「やっぱり、あの世界はいやだったんだ？」

「……まあ、あの『神様』は少々……かなり、我が侘が過ぎたからね」

老人は顔をしかめて見せた。相当いやだったのかな。

「まあ、そういうわけで君によりよい『世界』を作ってもらおうか
と思ってる。……君は思い浮かべるだけでいい。その通りに世界は形作られていくよ」

「なんだ、意外と簡単なんだね」

深呼吸して目をつむった。

次々と想像していく。

壁で閉ざされた世界。完璧に計算され尽くした街。

人々は決められた通りに決められた仕事を日々こなす。
決められた通りにしか世界は動かない。

嗚呼、なんてすばらしい秩序ある世界！

次々と創造していく。

大きく息を吐いて目を開けた。

「おお……！」

思わずため息がこぼれた。

画一された街。そこで規律正しく動く人々。

そう、これこそ僕の求めていた世界！

これでどうだ、と老人を振り返ると、老人はちよつと困った顔をしていた。

「確かにすばらしい世界だが……………」

「?どうした?」

「……………いや、何でもない。……………どうせすぐ、な」

老人の言葉がどこか少し引つかかったが、僕の世界を見渡せばそんな思いは吹き飛んだ。

こんなすばらしい世界、ほかには絶対にない!

しばらく眺めていたら、老人が少し遠慮気味に声をかけてきた。

「……………なあ、ちよつとだけこの世界に手を加えないかい?」
思わずむつとして老人を睨み付けた。

「何いつてるんだよ、この世界はこうでなくちゃいけないに決まってるじゃないか」

完璧だからこそいいのだ、この世界は。非の打ち所がない!

老人は深くため息をついた。

「……………まあ、いいさ。気長に待つよ。幸い時間は気にしないでいい立場だからね。……………もしこの世界に飽きてしまつたなら、私を呼ぶがいいよ」

老人は背を向けてどこかへ消えていった。

僕は改めて僕の世界をみつめた。

「どうして飽きるんだよ、こんなにもすばらしいのに」
ずれた眼鏡を押し上げた。

真実の国

決められた数だけ鳥の鳴き声を数えて、私は飛び起きた。

決められた歩数通りに歩いて決められた服を着て決められたタイミングでお母さんに挨拶をする。

「おはようお母さん！」

「おはよう。いい朝ね！」

決められたものと一寸も違わぬ笑顔でお母さんが微笑んだ。

決められた朝食を決められた手順でとって、私は決められた仕事に出かけた。

「行つてきます！」

「行つてらしゃい！」

すべては神様の秩序の上に。

私の決められた仕事は毎朝決められた人の家に決められた数のリングを決められた時間に届けること。

もちろんその間にすれ違う人も、挨拶する人も、それぞれの家までの歩数も、右と左どちらから踏み出すかも、全部全部決まっている。そりゃ、毎日ちよつとずつの違いはあるけど、それだって長い目で見たら神様の秩序に従ったことなんだ。きつと最後の時にはすべてが丸く収まってそれはきれいな、一片のかげりもない完璧な世界が生まれるだろう！

決められたとおりのステップを踏みながら私は進む。

途中でリングを一つ落としたけれど、これももちろん秩序のうち。私の落としたリングを拾う役目の人がいて、その人が周りの人にその話をして、周りの人の何人かがリングがほしくなって、私の新しいお客さんになって……。私にすべてを理解することはできないけれど、きつとこんな感じで世界は回ってる。

すべては神様の秩序の元に。

一つ一つの行動に無駄なことなんて無い。みんなどこかでつながって、いつか私に返ってくる。そうして世界は回ってる。

この世界はそうしてずっと続いてきたし、これからもずっと続いていくだろう。

何故？それはもちろん、それが神様の『秩序』だから。ずっと確信に満ちていた。

この日までは。

ことり、と小さな音がした。

ほんとかすかな音だったのだけれど、たったそれだけで私のリズムはあっさり崩れた。

左足を踏み出すのが一瞬遅れた。ほんの一瞬でも、次に右足を出すのも一瞬遅れる！

「あッ・・・・・・・・！！」

ふわりと体が宙に浮く感覚。真っ赤なリングが宙を舞う。

「いてて・・・・・・・・」

あわてて立ち上がってリングを拾い上げた。

これも神様の秩序のうちだよな？そうなんだよね？

すべて拾って顔を上げると、

「・・・・・・・・！！」

あきらかに『無秩序』な世界が広がっていた。

互いにぶつかる人々。呆然と立ちつくす人。

たった一つ、私がちっぽけな小石につまずいただけなのに、神様の

『秩序』はあつという間に崩壊した。

「そんな・・・・・・・・」

私が？私が悪いの？私のせいなの？

そんな、そんなそんなそんなそんなそんなそんなそんなそんなそんな、

「私が・・・・・・・・？」

「ふう・・・・・・・・やつと仕事ができる」

この状況に似つかわしくないほど落ち着いた声がした。

「・・・・・・・・え？」

仕事なんてできやしない。私が小石につまずいたせいでもう秩序は崩壊した。それはすなわち、この世界の崩壊を意味する。

顔を上げると、そこには鳩をたくさんとまらせた老人が立っていた。老人も私の方をじつと見ていた。

「どうだい？新しい世界を創ってみないかね？」

新しい、世界？

そう、と老人は落ち着き払って微笑んだ。

「この世界はもうだめだ。君の『世界』を君の思うままに作れたらいいと思わないかい？」

何を言ってるんだろうこの人？私に世界なんて作れるわけが無い。

それに私は神様みたいに秩序を考えられる頭なんか持ち合わせちゃいない。だって私はリング売り。だって私は秩序に従うだけだから。

そんな私の頭の中をのぞいたように、老人は心配ないさ、と笑った。「君は、この世界がすべてだと思っているんだろう？それは違う、

ここ以外にもたくさん世界があるが、ここはかなり特殊な世界だ。秩序なんか考えなくていい。君の思うままに世界を作れるのさ。自由な世界だ！」

「・・・・・・・・おじいさん、何でも知ってるの？」

無い頭が混乱してきた。私やっぱり馬鹿だ。

ねえ、何でも知ってるなら、

「あの小石は何？どうしてこの完璧な世界に異物が混じったの？」

老人の笑みが若干変わったような気がした。

「さあ、ね。その答えを求めることができる世界、なんてどうだい

？」

知りたい、強く思った。

知りたい。なんで私は小石につまずいたのか。世界を壊さなくてはならなかったのか。

「創るわ。世界だって、何だって」

今までで一番はつきりした意識で言った。

「そうこなくちゃね」

老人は変な顔をして、鳩が老人の肩や頭から一斉に飛びつた。

「あつ………！」

次の瞬間、目の前が真っ暗になった。

一瞬見えた老人の目は、リンゴの蜜の色。

目を開いたら、そこにはもう混乱はなかった。

でもそれは神様の秩序の上じゃない。全然違う秩序で作られた別の世界。

リンゴの中身の色と光を映す水の色に輝くリンゴみたいにまるいものがたくさん回っている。確かにそこには秩序があった。

鳩の羽音に振り返ると、さっきの老人が帽子を軽くあげておじぎをした。

「私は案内人のオルズ。君が世界を作るお手伝いをしよう」

「難しい説明はいらないわ。はやく、どうやって世界を作ればいいのか？」

ちよつと落ち着き給え、と老人は苦笑した。だって、早くしなきゃ、早く世界を作って真実を確かめなきゃ！

「想像するだけでいいんだよ。それがそのまま『世界』になる。簡単だろう？ただ……」

最後まで聞いてられなかった。咄嗟に目をつむった。想像した。

次々と想像していく。

世界の壁は丸。そこではすべての真実がわかるの。
すべてが本当の姿でしか存在できないの。

「……………それが私の秩序。私にはこれくらいしか思いつかない
けど。」

次々と創造していく。

はつと目を開けた。

「これが……………！」

丸い世界。すべてが真実の世界。
きつとここなら、あの小石の真実もわかるわね！

「で、どうやって私の真実を確かめればいいの？」

「……………は？」

老人が首をかしげた。

「……………何よ、だって私は誰がどうして小石をあんなところ
においたか知りたくてこんな世界を作ったのよ？で、どうやるの？」

「……………ふ、はははははははははははは！」

一瞬の沈黙の後、老人は腹を抱えて笑い出した。

「な、何よ！何がおかしいのよ！」

「い、いや、ごめんごめん、でも君が悪いんだよ！人の話を最後まで
で聞かないから！」

え、どういうこと？え、え？

「いやあ、君だけには事前にこの世界に『想像』以外で関与できな
いことを話してあげようと思ったのにね！君が聞かないんじゃ意味
がない！」

なに？この人何いつてるの？あれ？え？どうして？何で？

「……………ふう。この世界はちょっと危なそうだね。さっさと
出て行くことにしようかな」

老人は鳩におそわれたように見えて、一瞬で居なくなつた。

私はただ一人、意味のない世界を見つめていた。

仮面の国

丸い壁に縁取られた、丸い空。

今日もあちらこちらで喧嘩が聞こえる。喧嘩は日常茶飯事。軽い言い争いからつかみ合いの大喧嘩まで、一日の間に実に種類に富んだ喧嘩に出会うことができる。

でも俺はあまり喧嘩に巻き込まれない。理由？それはたぶん俺がまともに喋れないから。何か喋ろうとすると、つかえてしまつて上手く喋れない。それが原因で殴られたりはするけど、そのあと無理に喋ろうとしなければ相手は飽きてどこかに行つてしまう。

……この世界は、疲れる。

市場をぶらぶら歩いていた。特に何か目的があるわけでは無いんだけど、特にやることもないし、じっとしているよりは喧嘩にも巻き込まれなくて疲れない。

そう思っていた矢先、

「よう！いいところで会うじゃねえかカネヅル！どうせ今日も使わないんだろ？」

……一番嫌な奴らにからまれた。

「き、きょうは、こここ、こぜ、にし、か、ない」

「あん？相変わらず何いつてるかわかんねーぞお前」

おら出せよ、とそいつは俺のポケットに手をつ突っ込んできた。その手をはたいてやって、一言一言区切りながら答える。

「じぶん、で、だす」

もちろん本当は金なんてひとかけらだつてやりたくない。でも、この世界は『真実の国』。持っていない、と真実ではないことを言うことはあり得ないことだし、かといって黙って何もしなかったら殴られる。

……ふつうの人だったら、ここで思っていることをそのま

ま相手に言ってしまうだろう。でも俺はとっさには言葉が出てこない。だから俺はおとなしく黙って金を差し出した。

「相変わらず結構持つてるよなお前、また明日もここで待つてるかなー！」

そいつは振り返らずに駆けていった。その背中を見送りつつ、俺はもう一つのポケットから

同じくらいふくらんだ財布を取り出した。

あいつらは、普通の人々は、俺が『真実ではないこと』を言っている、行っているとは思いつきもしないだろう。みんな馬鹿で愚かだ。そして、『羨ましくない』は真実ではない。

「やあ、こんにちは」

声をかけられ振り返ると、人の良さそうな老人が立っていた。

「・・・・・・お、か、かねは、ない」

おや、と老人は笑った。

「君、『ウソ』を付くのが得意なんだね。この世界では誰も付けないと思っていたよ」

聞き慣れない単語に首をかしげた。それだけでわかったのか、ああ、と老人はうなずいて説明しだした。

「君たちが言う『真実ではないこと』さ。この世界では『ウソ』をつけるのはとても難しいと思っていただけ・・・・・・君、ふつうとはちよつと違うみたいだね。言葉が詰まるんだ？」

うなずいて見せた。だからなんだっていうんだ？

「言葉が詰まることが無かったら・・・・・・とか、考えたことはないかい？」

固まった。すぐには答えられなかった。

「い、しゃ、か？」

違うよ、と老人は首を振る。

「ただ、君が困らないような『世界』を作る手伝いをするだけさ。どうだい、試してみないかい？」

言葉が詰まらなかったら。何度考えたことか！ようやく人並みになれる！

でも多分、面倒くさい喧嘩に巻き込まれることが少ないのはこの言葉のおかげだ。

ただ言葉が詰まるせいでおこる面倒もある！

でもただけが重なっていく。

俺が出した答えは、

「やる」

老人の瞳を鋭いくらいに見つめた。

「せかいをつくる」

老人がにっこり笑った、空から何かにおそわれた。

……そういえば、詰まらなかったな、さっきの言葉。

一瞬見えた老人の瞳は、太陽に輝くお金の色みたいだった。

目を開くと、そこには丸い空は広がっていなかった。

元居た世界じゃないのははっきりとわかる。

お金と僕の瞳の色にそれぞれ輝く丸いものが、それぞれかみ合って回っている。

上も下も、右も左も、それがどこまで広がってもわからない世界。

「ようこそ、君の世界へ」

声に振り向くと、老人が鳩を体中にとまらせながら微笑んだ。

「私は案内人のオルズ。さっきも言ったように、君が世界を作る手伝いをしよう」

「ど、どうやってつ、くる？」

見渡す限り丸いものがあるだけだ。ここから何が作れると？

「想像するだけさ。君の思うままに世界は形作られる！」

「そうぞう、だ、け……」

あ、ただし、と老人が思い出したように付け加えた。

「君は『想像』以外の方法では君の世界に干渉できない。君の声は届かないし、君の手も及ばない」

「いい。それで、いい」

喋らなければ面倒事には巻き込まれない。そして喋りたくなるのは、相手が、周りにしゃべっている人がいるから。

俺の声の届かない世界ならきつと、俺は静かに暮らせるだろう。黙って目を瞑った。

次々と想像した。

人々は必要最低限しか喋らない。それでいい。

そして人々は、表情すらも仮面で隠すんだ。それがいい。

争いはもはやほとんど存在しなくなるだろう。次々と創造した。

はやる気持ちを抑えて、ゆっくりと目を開けた。

「・・・・・・・・！！」

人々は顔をすっぽり覆う仮面をつけて、ひそりひそりと囁きあう。

それ以外に聞こえるのは鳩の鳴き声だけ。

なんて静かな世界。なんて理想の世界！

「ふむ。なかなか興味深い世界だね」

背後で老人が満足そうに言った。

「ちなみに聞くけど、この世界では真実しか喋ることができないのかい？」

首を横に振った。

「『うそ』、もつ、け、ける」

喋らない分考える時間はたっぷりであった。なぜあも騒々しい世界になったのか。思い至ったのは『真実しか喋れない』ということだ。俺は『ウソ』もつくことができたから、あまり喧嘩に巻き込まれなかったのだろう。

「なるほど。ますます面白そうだ」

老人は目を細めて俺の世界を見渡した。

「・・・・・・そろそろいこうかね。元の世界に戻りたくなったら私を呼び給え」

老人はそう言っ、鳩に包まれ見えなくなった。

静寂。

永遠の国

仮面のせいで視界が狭い。

石に躓いて転びそうになったところを慌ててバランスを取り直した。こんな仮面、もどかしくて仕方がない。

空を見上げた。

仮面のせいで世界が狭い。

道行く人々はみんな、全く同じ、顔をすっぱりと覆う仮面を被っていた。ぼくにだって、親しい人以外全く見分けがつかないさ。こんな非合理的な仮面、捨ててしまばいいものを。

おそらく誰もが一度は抱えたことのある思いだろう。しかし誰も口にはしない。そんなありえないことを口に出したら、『異端者』として社会的に排除されてしまうだろう！

そんなことを考えながら歩いていたら、突然誰かにぶつかってしまった。

「あ、ごめんなさい！」

転んでしまった相手に手を貸してたたせてあげた。ありがとうございます、とその人はすぐに去っていった。

こっちの不注意が悪いのにお礼なんて言われちゃってさ。

ぼくは掠め取った彼女の財布を遊びながら、仮面の下で小さく笑った。

時々ものすごく不安になる。

相手が何を考えているのかわからなくなる。そもそも相手がぼくの思っている通りの人物であるかどうかも怪しくなる。

すべては仮面のせいなのだと思う。一体どうして、ぼくらの神様はこんなわずらわしい仮面なんて作っただ？もちろんそれも、言っ

ちやいけない。

ぼくは目当ての店にたどり着いた。

「いらつしやいませ！」

まあ、本当のお目当ては店の商品じゃなくて、この店番の女の子だけだ。彼女もほかのみんなと同じでそんなにたくさんはしゃべらない。でも時々聞こえるこの声は、ほかの誰とも似ていない明るくて透き通って……ああもう、とにかくとってもすてきな声だ。彼女の声がかつと聞けるんじゃないかと思って、ぼくは必要もない品々を時間をかけてじっくりと眺めるふりをする。今日はさつき盗った金もあるから、なにか買っていこう。もちろん仮面の下ではしつかり彼女の動きを見つめているのさ。

彼女はどんな顔なんだろう？

ふとそんなことが脳裏をよぎって、そういえば、と気がついた。

ぼくって、他人の顔を一度も見たことがないんだ。

自分の顔なら時々、顔を洗うときに水に映してみたりする。でもそれ以外だと、家族の顔すら見たことがないような気がする。彼女の顔を想像しようにも、ぼくには材料が少なすぎる。ただ漠然と声と同じ、きれいな顔なんだろうなと思うけど、『きれいな顔』がまづぼくはわからないのだ。

見たい、彼女の顔が見たい！

あわてて自分自身を押さえつけた。だめだ、そんなことしたらだめだ！そんなことしたらどうなるか、わかったもんじゃない！でも見たい、いやだめだ！

「どうしましたか？」

顔を上げたら目の前に彼女の顔があった、気がついたら手を伸ばしていた。

「！」

やっぱり彼女はきれいだと思った。

店の空気が凍り付いた。みんな彼女の顔を呆然と見つめていた。彼女の顔は白くなり、青くなり、赤くなって、彼女はよろよろと立ち上がり歩き始めた。全員の視線が彼女の後を追いかける。彼女はカウンターの引き出しから、はさみを取り出した。そして自分の顔を切り刻み始めた。

何が起こっているのかわからなかった。たぶん、店にいる誰もわからなかったのだろう、ただじっと、きれいな声を囁らしながらはさみで顔を殴り続ける彼女を見つめることしかできなかった。

「おやおや」

突然耳元で老人の声がした。はっと正気に戻って振り返ると、またあんぐりと口を開けてしまった。

この人、仮面をつけていない！

老人は眉をひそめて彼女を見つめていた。

「誰も彼女を止めないのかい？」

老人はぼくの視線に気がついて、こちらを見下ろした。ぼくのもっている彼女の仮面をみると、にやりと笑った。

「ほうほう、なるほど。君が原因か」

「ち、ちがうつ！」

とつさに仮面を背中に隠した。仮面越しの人々の視線が、今度はぼくを貫いた。

さあつと顔から血が引いていくのを感じた。

「そんなに彼女の顔が見たかったのかい？………永遠に彼女の姿を見続けられるようにしてあげようか？」

ここから逃げ出したい一心で僕はうなずいた。店の扉を突き破って鳩が店内に飛び込んできた後のことは、覚えてない。

たった一つ覚えてるのは、老人の星と同じ色の瞳だけ。

気がつくともう誰の視線も突き刺さらなかった。

その代わり、元居た世界ではないようだ。

星の色と輝く鼠色の円盤のようなものが互いにかみ合って回っている。

気が滅入るほど広い、どこまでも続く空間。

でも、

「彼女はどこ？」

周りをきよろきよろ見渡していたら、老人に笑われた。

「まだいないよ。君が作り出すんだ」

「作り出す？どういうこと？」

人間を作るなんてきつと無理なのに。

「想像するんだよ。君が想像したことがそのまま現実になる」

「想像……」

想像してごらん、という老人の声に従って、静かに目を閉じた。

ゆっくりと想像した。

彼女の美しい髪。黒くて緩やかに波打っていた。

彼女の美しい声。明るくて透き通ってどこまでも広がるような声。

一瞬垣間見た顔。ぼくは基準を持たないけれど、とても美しいと思った。

そして彼女は『永遠』だ。

ゆっくりと創造した。

思い出せる限りの彼女の姿に、思いつく限りの理想の『彼女』を重ねて、おそろおそろ目を開けた。

「っ！」

目の前に『彼女』が立っていた。想像通りのきれいな姿で。

「ああ………！」

ふれようと近寄ったけれど、ぼくの手は『彼女』の体をすり抜けてしまった。

「さわることは出来ないよ。君は想像によつてのみこの世界に干渉できる」

「世界？」

老人はああ、とうなずいた。

「説明してなかったかい？ここは『君の世界』だ。自由に、想像通りに『世界』が作れるんだよ。 どうだろう、『彼女』だけじゃ寂しいだろうに、もうちよつと人間を増やしてみたら？」

そういわれて改めて『彼女』を見た。………確かに少し、『寂しそうな顔』をしているように見える。まあ、他人の表情なんてぼくには見分けもつかないのだけれど。

じゃあ、とうなずいてほかの人間を想像した。ぼくと彼女と老人を足して割ったような顔。みんな同じだ。ほかの顔をしらないから、それ以外なんて作りようもない。 ついでに世界も作ってやった。彼女が住むための花に囲まれた城。ほかの人々はその周りの家に住まう。

「ほう、人々はみんな『永遠』なのかね？」

いいえ、と僕は頭を振った。

「『永遠』なのは『彼女』だけ。ぼくは『彼女』だけを見続けることができればいいから」

人々は古い、死ぬ。でも『彼女』は『永遠』だ。ずっと若いままですっと死なない。

ふん、と老人は満足げにため息をついた。

「次でノルマは達成だし、幸い時間は気にしなくてもいい身だし。ちよつと熟成させてみるか」

よく意味のわからないことをつぶやいて、老人はぼくをみてほほえんだ。

「自己紹介が遅れてしまったが、私は案内人のオルズ。元の世界に戻りたかったら私を呼びたまえ」

老人はあつというまに鳩におそわれて、見えなくなった。

ぼくは再び『彼女』に視線を向けた。

たくさんの人に囲まれながら、『彼女』はまだどこか寂しそうだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2776z/>

神様の箱庭

2012年1月13日22時57分発行